

事務局から「いつものように、読み物的にご自由に書いていただいて構いませんので・・・」と総評原稿の依頼のメールが届いたのは、テレビで新型コロナウイルス感染の PCR 検査についての議論を聞いている時でした。「この検査ができる場所は限られていて、しかも一日に検査できる検体数も限られる・・・」などと解説する声が聞こえていました。丁度、総務省の「医師対医師の遠隔医療の普及促進にかかる調査研究」へ参加して、その一環である「衛生検査所を介した医療機関連携による遠隔病理診断モデルの実証調査」に携わっている所でしたので、「今回の場合は検体の出所は豪華客船のみで多くの疑義者が集まっているので、各地に送るのではなくここで検査が行えると効率が良いかな。そうすれば搬送の手間や時間、搬送途中での不慮の事故によるウイルス拡散の危険性も無くなる」と思って、はたと7、8年前の記事を思い出し、探してみました。『分子病理学検査が、遠隔地でも可能に』という記事が2013年のグローバルニュースにあるのを発見。そこには、「オーストラリアのある病理学者が、移動式医療検査の可能性に挑戦している。その手法とは、分子診断検査をスーツケースに入れて移動することにより、その検査機器のコンセプトは携帯の分子微生物検査で、一連のモジュールで構成されている。レファレンスラボで開発された分析表を適応させることにより、現場条件で新しく発生する感染症の前兆を看破する PCR ベースの分析を、現在使っているテストプラットフォームを利用して供給できることを証明した。今まで手が届かなかった遠隔地の患者の直ぐ近くに移動して分子検査を行うことに期待を寄せている」とありました。ここで言う病理学者とは我が国でいう臨床検査医に当たります。その後どうなったかは知りませんが、このようなことが出来ると良いでしょうね。検査の結果は必要とされる時直ぐに欲しいものです。なるべく検体採取から時間がかからない時期に、そしてその場で。そう思って、随分前になりますが、「細胞診の出前（現在いうところの ROSE や POC に当たります）」などを行ったことがありました。検体検査、分子病理検査も同じでしょう。そういえば、術中迅速の遠隔病理診断についてある企業の方と話をしていた時に、「依頼元病院に病理医は居ないが病理検査室があり、病理技師さんと標本作製機器および WSI スキャナーがないとできないのですよね」というと、「先生、新たな商売ができるじゃないですか。術中迅速診断車ですよ。ここに必要な機器と病理技師さんを乗せ、必要とする病院まで移動し、そこでデジタル化病理画像（WSI）を作製し電波で契約している病理医に画像を送って診断してもらい、手術場に連絡してもらうのですよ」と言われました。検診車ならぬ、検査車である。すごい発想だと感心したことがあります。「窮すれば通ず」、「必要は発明の母」で、多くの施設で望むのであれば、このようなこともそのうちできるようになるかも知れません。

（JPIP 2019 総評のエッセーから引用）